

## 感動表現と人間関係能力の発達における実証的研究Ⅱ

— 幼児の感動表現と人間関係の展開 —

角田富美子 (創価大学)

### 1. 研究の目的

子どもたちは何に対して、どのように感動するのか、子どもたちの生活から自然とのかかわりや、体を思いきり動かすあそびが少なくなり、ハイテク玩具が遊びの空間を占めるようになった。幼稚園教育要領「環境」(3)には、身近な事象や動植物に対する感動を伝えあい、共感しあう事の大切さが示されている。感動表現については、戸梶(2001)・早坂(1981)・A. アドラー(1927)が、身体感覚・感情の動き・情動としての喜びとして捉えられている。これらの先行研究をふまえて、幼児の感動表現は、発見、気づき、驚きなどの快感情が、喜びを伴った感動として考えられた。従って、ここでいう感動とは、保育の実践をふまえて、快感情に限定して定義づけた。最近では、環境の変化による実体験の不足から発見や気づきが乏しくなり人間関係も希薄になったと言われる。しかし、幼児期の感動表現の豊かな子どもは人間関係も豊かに育つと考えられる。幼児期の人間関係能力とは、人とのかかわる力のことである。辰巳(1990)は、人間関係の心理学的意味において「人とのかかわる力は基本的欲求として、本来もっている。子ども同士が、その交渉を通して人と交渉する技能を学んでいく」ところが、松村(1979)は、人間関係の発達について、「(自己、人、物の)接在共存状況の志向的発展過程である」とのべている。つまり、人間関係の発達は、人と人との間のみで起こるだけではなく、自己、人、ものとのかかわりによって関係状況の発展が志向的になされていく過程において実現されていくと捉えている。そこで、本研究は、以上の人間関係の捉え方をふまえて、幼児の感動の表われが友達関係の育ちにどのように影響があるかを明らかにする。

### 2. 研究の方法

「予備調査」①専門の保育者 10 名によるパイロットスタディを 2002 年 10 月に実施。②東京・千葉の幼稚園・保育園に在籍する保育者 50 名と保育者養成大学 2 年に在籍する学生 67 名に記述式、自作質問紙で自由回答式によるアンケートを 2002 年 10 月に実施。

「本調査」①記述式アンケート結果を KJ 法により分類し、調査用紙を作成。②感動体験尺度作成のために、東京・千葉の保育者養成大学の学生 200 名(2 年生)

にアンケート調査を 2003 年 1 月に実施。

「観察」調査で得られた感動体験尺度をもとに、①東京の公立幼稚園の 5 歳児を観察し、幼児の感動表現場面を捉えた。②調査で得られた感動表現のカテゴリーを参考に、抽出児 4 名の行動を観察・分析し、感動表現による人間関係のかかわりと発展を考察した。

### 3. 結果と考察

(1) ①の予備調査について 38 項目の感動表現から感情の動きを検討した結果、「喜び、発見、気づき、驚き、達成感、尊敬、共感」等の快感情が、喜びを伴った感動と考えられた。②幼児期の感動表現の構造を明らかにするため、得られた 183 名の回答に基づき因子分析(主成分分解、プロマックス回転)を行い、幼児期の感動体験尺度を作成した。第 1 因子は「小動物との出会い」第 2 因子は「自然の不思議さへの気づき」第 3 因子は「友だちとの共感」第 4 因子は「課題の達成」第 5 因子は「美しい物への憧れ」と命名した。

(2) 本調査で得られた感動体験尺度、5 つのカテゴリーの感動場面で表現の方法を観察し、感動の伝えあいについてエピソードとしてまとめた。①観察対象児は東京・公立幼稚園の 5 歳児 3 5 名②観察場所は F 幼稚園の保育室・園庭③観察時期は 2003 年 5 月～10 月延 14 回④観察時間は午前 9 時～2 時⑤観察方法は自然観察法により行動描写による自由記述。その結果、幼児の感動表現の方法を見てみると、伝えたい対象へのかかわりに、言葉や表情やしぐさ、身振りなど五感を使って表現している。特に友だちに働きかけている姿の中から感動の様態を探ると同時に、対人関係のなかでのかかわりを観察した。「小動物との出会い」では、生き物と触れあう事への愛着と優しさ、生き物の生態や小動物への思いやりが仲間自然に伝わりあい、互いの思いが分かり合える関係が見られた。「自然の不思議さへの気づき」では、身近な草や木の実が遊び方によって色々に変化していくことに驚いたり、気付いたりする感動を、共に体験する嬉しさが仲間関係を豊かにしている。「友だちとの共感」では、互いの置かれた状況の認識と相手の言葉を媒介として直接的な関係を引き起こし、安心して仲間入り出来る雰囲気や役割の交代、協力、挑戦の面白さに共感する姿が見られた。「課題の達成」では、共通に経験した感動

場面が、共に課題に挑戦し、課題を達成する中で、仲間として認め合う新たな仲間のかかわりが見られた。

「美しい物への憧れ」では、きれいに飾られた場や、成長した喜びを共に祝ってくれる友だちに親しみを感じ、憧れともなっている。幼児の感動表現による人とかかわりは、喜び、嬉しさ、驚き、尊敬、達成感などの感情の表れの五感による共感である。共感(empathy)とは他者の情緒を弁別・理解し、同じ情緒的経験をするという心の働きであり、5つのカテゴリーで、それぞれかかわりの様子が見られた。全体として、幼児の興味や関心による感動表現が、相手の共感を誘い、さらに仲間意識に支えられて遊びに発展し、友だち関係が育っているといえる。このことは、荘敏(1996)「文化と感情」布施(1995)「共感的な遊び」においても共感とは、「向社会的行動」を支える重要な基礎の一つとされている。

(3) 本調査で得られた感動表現のカテゴリーを参考に、自然観察によって4人の抽出児の行動を分析し、感動表現による人間関係のかかわりと発展について考察した。保育の場は、教師と子どもたちが様々な人間関係をつくり出す世界である。感動表現と人間関係を4人の対象児の事例から、「小動物との出会い」の場面で、S男を通して人とかかわる力がどのように育っていくかを見てみると、教師に感動の表現を伝えることで、認められ、安心し、自分の居場所が安定する(観察1)。興味のある虫との出会いは、共感できる友だちとかかわりを生み、発見や、喜びを共有する関係として、心地よさが得られている(観察2)。同じ興味をもつ友だちへの積極的なかかわりは、友だちのよさに気づく関係となり(観察3)、共に感動を共有しあえる仲間としての存在が認めあえる関係に発展してきている(観察4)。以上のように、S男の身近な小動物に対する感動表現が、まわりの友達の興味や関心を引き起こし、驚きや発見、繰り返し挑戦する中での気づき、友だちと共に楽しむ嬉しさや喜び等、感動を共有することで、仲間関係が安定し、人とかかわる力が培われてきたと言えよう。感動表現の乏しいと見られたN子の「友だちとの共感」の過程を観察してみると、友だちに認められたいという思いが自分からかわろうとして感動を伝えている(観察1)。友だちに積極的にかかわろうとして習得した技を教えたり、遊びをリードしようとする(観察2)。さらに、動物に対するいたわりや、思いやりによって、友だち関係の安定と仲間としての信頼関係が見られるようになっている(観察3)。感動表現の豊かなC子はS男の声

にいち早く駆けつけ、自分から欲求を伝えるなど、積極的にかかわっており(観察1)、驚きや喜び、感じたことなどを言葉や表情で友だちに伝え合っている(観察2)。言葉や表情や動きによる感情の共有によって互いの気持ちが分かり合え、安心して自己を表出出来る関係が育ってきている(観察3)。「課題の達成」の場面で、感動表現の豊かなI男を通して人とかかわる力の育ちを見てみると、I男の課題達成に共感した教師によって、友だちの興味や関心を引き起こし、飛行機づくりへの達成感と友だちとかかわるきっかけとなり(1)、共通の経験による共感が遊びのイメージを広げ、友だちとの協力や関係の広がり(観察2)となっている。さらに、応援団は皆のあこがれ、友だちと心を合わせて表現する快感や満足感互いの感動を高め、目的をもって取り組む中で、共に、成功感や、達成感を味わうなかに人とかかわる力の育ちを見ることが出来る。

以上の事例から、幼児の人とかかわる力は、安心して自己を表出することのできる信頼関係、思いや感じを伝えるコミュニケーション能力、共感による相互啓発であるといえる。

#### 4. まとめと今後の課題

アンケート調査の結果から、学生が捉えた幼児期の回想性をもって感動体験尺度を作成し、幼児期の感動体験には「小動物との出会い・自然の不思議さへの気付き・友だちとの共感・課題の達成・美しい物への憧れ」があることを因子分解によって明らかにした。この尺度を用いて感動表現のカテゴリーを実証するために、幼児の物との出会いや遊びの姿、友だちとの関係について観察し、感動の伝えあいや、共感の広がりによって人とかかわりや発展がどのように展開するかを研究した。その結果、幼児は、感動場面の5つのカテゴリーのなかで、幼児の興味や関心による感動表現が、相手の共感を誘い、仲間意識に支えられて遊びに発展し、友達関係の育ちが確認された。さらに、4人の事例から感動表現と人間関係を見てみると、幼児の人とかかわる能力は、安心して自己を表出する信頼感、思いや感じを伝えるコミュニケーション能力、共感による相互啓発であることが明らかになった。このことは、感動を共有する自己、人、物とかかわりによる人間関係の発展する過程と見ることが出来る。今後の課題として、対象児以外の人間関係の展開と共に、コミュニケーション能力、共感による相互啓発について、統計的に実証できる方法を探っていきたい。